# 高性能検知器「何も聞こえない」

## 比地滑り

# 位置特定 泥で困難

【ギンサウゴン（比レイテ島）＝遠藤富美子、吉田健一】見渡す限り泥と岩の固まりが広がる―。フィリピン・レイテ島の大規模地滑りで壊滅したギンサウゴン地区。発生から4日目の20日も、懸命の捜索活動が続いたが、児童246人が土砂にのみ込まれた同地区の小学校付近は、〝死の河原〟となっていた。

泥でぬかるんだ細い山道を徒歩で約2時間。雨で増水した川を腰までつかりながら渡り終えると、目の前に茶色い泥の山が立ちはだかった。地滑りの最先端部分だ。357世帯、1857人が生活していた小村は、土砂の下に埋もれ、痕跡すら残っていない。荒れ果てた採石場のようだ。

「神の意思なのか。一体、何のために？」

案内してくれた同地区出身でセブ島に住む専門学校生ネルソン・ムンドさん(25)がぼう然とした表情でつぶやいた。「兄が土砂の下にいる。もう生きていないと思う……」

壊滅した同地区の面積は約42ヘクタール。小学校があったと見られる地点を中心に、フィリピン、米国、マレーシアの各部隊が体温検知器や音声検知器などで、生き埋めになった児童の捜索活動を懸命に続ける。

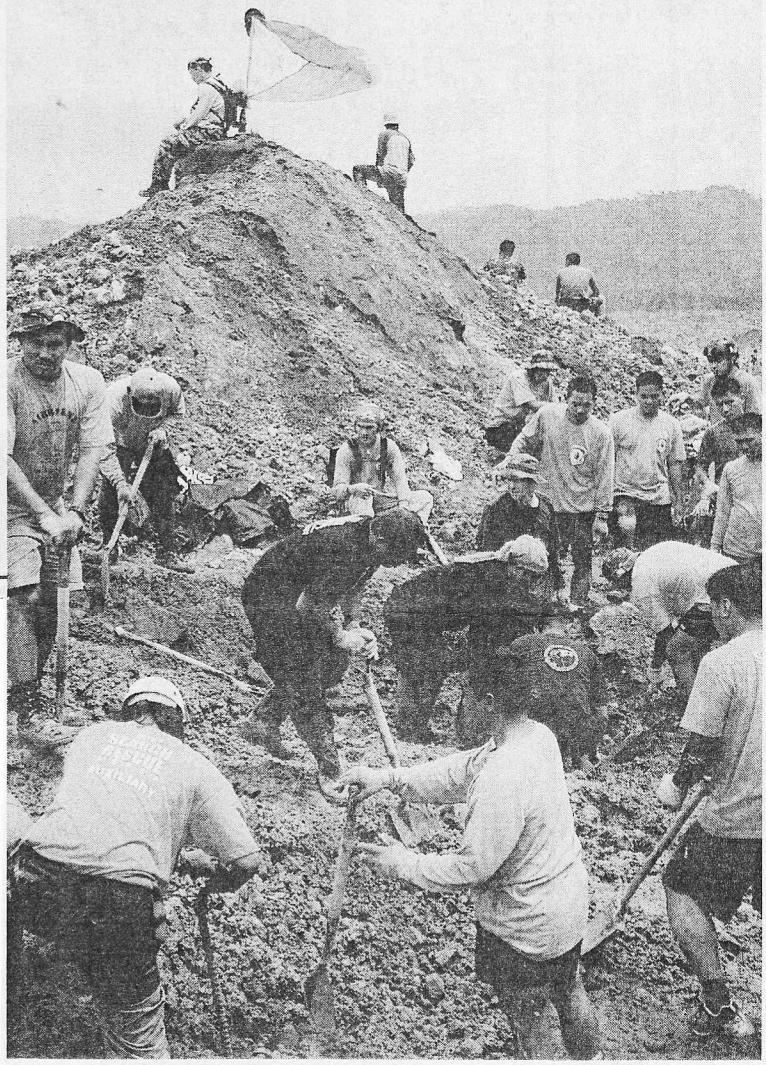
「静かに！　動くな！」。音声検知器を使うためマレーシア災害救助隊のサハール・ユノス司令官が大声で指示を出すと、隊員らは土を掘るスコップの手を一斉に止めた。埋もれた人の心臓の鼓動までも感知できる高性能だが、何も聞こえない。「次の場所に移動しよう」。同じ光景が何度も繰り返される。台湾の捜索救助隊の呂正宗隊長は「近くの川の水の音を拾ってしまい、うまく行かない」とこぼした。

捜索が難航している最大の原因は、土砂があまりに多く、どんな建物がどこにあったのか位置を特定できないこと。比沿岸警備隊のアーテッド・エスゲーラ中尉は「地表までの泥の厚さは19日時点で32メートルだったが、20日は55メートルになった。地中では今も地滑りが続いている。山から流れてくる泥がどんどんたまっているんだ」と苦々しげに話した。

地元の災害対策本部によると、20日までに確認された死者数は80人にのぼった。

### 50人救出情報

【ギンサウゴン（比レイテ島）＝遠藤富美子】フィリピン・レイテ島で起きた大規模地滑りで、比ABS―CBNテレビは20日夜、被災地のギンサウゴン地区で同日、捜索活動を開始した米海兵隊の情報として、同地区の教会近くで住民約50人が救出されたと伝えた。米海兵隊の報道官は「確認していない」と述べ、これを否定した。



多数の児童が生き埋めになった小学校の捜索現場には、目印にフィリピン国旗が立てられた（20日午後、レイテ島ギンサウゴンで）＝宮坂永史撮影